



No.162

2007. 2. 15

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/>

目 次

| | |
|-----------------------------------------|----|
| 学術機関リポジトリの現状と今後の展望 (渡邊俊彦) | 1 |
| 木曾三川流域関連の史料寄贈によせて (秋山晶則) | 5 |
| 「館長と話そう! 2006」を開催 | 7 |
| 「西洋の発見」展示会を開催 | 8 |
| 電子ブックが増えました。 どうぞご利用ください。 | 9 |
| 利用者から見た図書館 | 11 |
| 本学教員著作物の寄贈リスト | 12 |
| 第2回「国立大学附属図書館の課題に関する 館長懇談会」を開催 | 13 |

学術機関リポジトリの現状と今後の展望

渡 邊 俊 彦

はじめに

本稿では平成18年11月8日に名古屋大学情報連携基盤センター、名古屋大学附属図書館、国立情報学研究所の共催で開催された第2回東海地区CSI事業報告会及び名古屋大学学術機関リポジトリの現状を報告します。

平成18年3月23日に公表された「学術情報基盤の今後の在り方について(報告)」(科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会)において、「我が国の大学等や研究機関が有しているコンピュータ等の設備、基盤的ソフトウェア、コンテンツ及びデータベース、人材、研究グループそのものを超高速ネットワークで共有する『最先端学術情報基盤』の構築」の必要性が指摘されています。この「報告」を受けて国立情報学研究所は、「最先端学術情報基盤(Cyber Science Infrastructure: CSI)」を大学等と連携して構築することを目指しています。

名古屋大学ではこのCSI事業の理解を深め、各機関の情報交換、意見交換をする場として東海地区CSI事業報告会を、本年度は、第1回「大学における電子認証基盤」、第2回「大学における学術機関リポジトリ構築に向けて」、第

3回「次世代学術情報ネットワーク」を開催しました。

学術機関リポジトリを中心とした第2回CSI事業報告会では、76名(うち学外者、53名)の参加者をえました。報告会では、安達淳国立情報学研究所開発・事業部長(以下、安達教授)がCSI事業委託者の立場から「CSI事業と学術機関リポジトリの構築」、図書館の立場から伊藤義人名古屋大学附属図書館長(以下、伊藤館長)が「学術機関リポジトリ ~図書館の役割~」、研究者の立場から佐藤義則三重大学人文学部教授(以下、佐藤教授)が、「研究・教育と学術機関リポジトリ ~研究者の役割~」の講演及びパネルディスカッションを行いました。

CSI事業と学術機関リポジトリ

安達教授は講演の中で、CSI事業の目的について、「このCSIというのは、その上で活発な教育・研究活動が行われるような環境を作ることです。その中でコンテンツ、データベース等が重要になると考えています」と話され、学術機関リポジトリの重要性を指摘しました。学術機関リポジトリについて、「扱うコンテンツやサービスには、かなり幅があるし、大学の活動と



写真1 安達教授の講演

も関連するので、多様性があります。1つ重要なのは、機関のリポジトリであって図書館のリポジトリではないということです」として大学全体の取り組みであることが重要だと強調しました。

また、今回のCSI事業を「競争的資金、一般的な意味での競争的資金ではありません。短期的な成果を求めるプロジェクトをやってほしいとか、その成果を評価するというためにやっているわけではなくて、あくまでもCSIという学術の基盤整備を継続的に行っていくための一環としてやっていただくという仕事です」と事業の性格を明確にしました。

CSI事業の具体的な取り組みとして平成17年度は、19大学に学術機関リポジトリ構築に関する事業を委託し、平成18年度は、機関リポジトリ構築の基本に当たるコンテンツを収集・提供に関する領域1と先端的な研究開発活動を推進する領域2で公募が行われました。その結果、領域1で57大学を、領域2で22テーマを採択したと報告されました。(詳細は、<http://www.nii.ac.jp/irp/> を参照)

最後に、学術機関リポジトリに対して、国立情報学研究所の役割に言及されました。

1. 財政的な支援
2. メタデータを始めとする各種の標準化作業
3. 人材育成、啓発活動を通して学術機関リポジトリが発展していく環境の醸成
4. フルテキストと学術機関リポジトリ群をつなぐ横断的検索機能を持ったポータル構築

主にこれらの4つの分野で国立情報学研究所が機能したいと表明しました。

学術機関リポジトリ～図書館の役割～



写真2 伊藤名大館長の講演

伊藤館長からは、図書館の立場から学術機関リポジトリ構築について報告がありました。

講演では、「重要なことは、大学で生産される知的生産物を永続的に管理・運営することです。そのため、1)名古屋大学をアピールできる、2)説明責任を果たして成果を社会に還元できる事を説明し、大学として取り組む事業であることを総長、教育研究評議会です承を得ました。」と図書館の事業ではなく、大学の事業として取り組むことの重要性を強調しました。

また、コンテンツ収集のために重要な広報活動については、部局説明会を基本的には教授会で開催していると紹介し、その意義を伊藤館長は「これは、部局長に説明することが非常に重要であると考えているからです。原則、図書館長である私と図書館職員が出向いて、前半を私が、後半を職員が説明するという形で行っています。」と説明し、トップダウンの重要性を指摘しました。

この広報活動で学術機関リポジトリの運用に関して様々な問題点が浮上してきたとして、次のような具体例をあげて、コンテンツ収集の難しさの説明がありました。

- ・基本的な理解は得られるが実際には論文の登録は少ない
- ・著者最終稿が著者の手元にない場合が多い
- ・雑誌論文との体裁などの違いを気にする
- ・本として出版したいので登録しない

これらの問題を克服するために、学術機関リポジトリに理解のある研究者を組織化して、「研究者協力コミュニティ」の形成を目指して

いるとの説明があり、トップダウンのみでなくボトムアップの取り組みも必須であると指摘しました。

最後に地域連携に言及し、実際の取り組みを紹介しました。これは東海地区国立大学図書館協会の枠組みの中で、学術機関リポジトリ実務担当者会議を開催することで、「地域大学間の連携を模索するとともに、各大学の事例とノウハウの提供を目的」とするものです。また、情報の共有を行うため、情報公開サイト設置の報告がありました。

(<http://info.nul.nagoya-u.ac.jp/pubwiki>)

教育・研究と学術機関リポジトリ ～研究者の役割～



写真3 佐藤教授の講演

佐藤教授は、研究者の立場から教育・研究と学術機関リポジトリについて講演をされました。

まず、学術機関リポジトリ進展の背景の一つであるOpen Accessの現状を紹介し、特に2000年以降急速な展開があったことを指摘しました。その中で、象徴的なものが、BBB、あるいは3Bと呼ばれている宣言だとし、2002年のBudapest Open Access Initiative、2003年9月のBethesda Statement、2003年10月のBerlin Declarationを非常に考え方が整理されていると評価し、Open Access進展の要因の一つとして挙げました。

また、Open Accessの対象が、1) 学術論文、2) 文化遺産、3) 研究データの3種類あるとし、このことが学術機関リポジトリの多様性が生まれる要因になっている。その上で「大学が

長期的な学術機関リポジトリを始めとするサービスモデルを考える場合は、Open Accessに対する考え方を理解した上で決める必要があります」と指摘がありました。

学術機関リポジトリ、電子ジャーナル、電子ブックを始めとする学術情報のデジタル化の進展が教育・研究に及ぼす影響について次の2点をあげました。

- ・特に研究においては、人文社会科学を含む全分野でネットワーク、コンピュータの利用が進んでいる
- ・利用スタイルが変化している

特に利用スタイルの変化について、従来図書館で行われてきた、情報の要求、入手、リーディングが、ネットワーク上の情報資源の中でそれぞれのプロセスが実施可能となっている。このことを前提とした上でこれからのサービスを構築していく必要があると、今後の課題を指摘されました。

名古屋大学学術機関リポジトリの現状

ここでは、名古屋大学学術機関リポジトリ(愛称、NAGOYA Repository)の利用のされ方から見た特徴と、名古屋大学のリポジトリの特徴的内容、及び継続的なコンテンツ収集の取り組みについて紹介します。

平成18年12月時点でのNAGOYA Repositoryのコンテンツ登録数は以下の通りです。

| | | | |
|--------|--------|------------|--------|
| 学術雑誌論文 | 388 | 図書 | 9 |
| 学位論文 | 317 | 会議発表資料 | 52 |
| 紀要論文 | 3,447 | 教材 | 49 |
| 貴重書 | 29,889 | Webサイト情報資源 | 1,937 |
| | | 合計 | 36,088 |

コンテンツ収集方針の特徴は、学術雑誌掲載論文、学位論文のみならず貴重書、Webサイト情報資源を対象としていることです。学術的に価値のあるもの、研究者が研究対象として利用できる資料を収集するという方針の下、貴重書は名古屋大学が所蔵する高木家文書、伊藤圭介文庫等のメタデータと一次データを収集対象としています。情報連携基盤センターが運営している名古屋大学のWebサイト情報を収集してい

の拡充に努めていき、持続的なコンテンツ収集体制を確立していきたく考えています。

持続的コンテンツ収集のもう一つの柱である学位論文の収集は、関係する部局と連携して取り組んでいます。具体的には以下の手順で実施することを予定しています。

1. 各部局の学位論文提出説明会等でNAGOYA Repositoryへの学位論文登録依頼書及び登録同意書を配布
2. 学位論文提出時に同意書と学位論文の電子

ファイルも同時に提出

3. 各部局の担当掛から同意書と電子ファイルを送付してもらい、附属図書館で登録

今年度は、情報科学研究科、国際開発研究科、工学研究科を始めとして各部局で検討をしていただきました。一部の部局では今年度分から登録開始の予定です。

(わたなべ・としひこ 情報システム課長)



木曾三川流域関連の史料寄贈によせて

秋山 晶 則

1. 歴史情報資源調査・研究プロジェクト

附属図書館及び同研究開発室では、全学の学術情報基盤の高度化のため、ハイブリッド図書館実現にむけた諸事業・研究活動を行うとともに、学術情報資源を通じた社会貢献活動を行ってきた。

その一環として、木曾三川流域治水で知られる旗本高木家文書（総数10万点以上）をはじめとする所蔵史料の高度活用に向け、地域貢献特別支援事業費の措置により、愛知県や大垣市など関連自治体とも連携しながら、木曾三川流域における歴史情報資源の調査・研究を進めつつある。当該プロジェクトの内容は、Libst Newsletterや研究開発室年報などを参照いただくとともに、ここでは、プロジェクトを通して最近寄贈のあった2件の史料について紹介するとともに、うち1件については、2006年秋季特別展で成果の一端を公開する機会を得たことから、所蔵史料活用をめぐる課題とあわせ、その概要を報告することにしたい。

2. 日比家文書と2006年秋季特別展

まず1件目は、揖斐川中流域で活躍した豪農・日比家に伝来した日比家文書（約5,000点、2005年12月受入）である。日比家は、江戸期以降、美濃国石津郡沢田村（現岐阜県養老町沢田地区）の庄屋や郡中惣代、旧養老村村長などを務めたことから、同文書には村や地域の運営に

関する史料が多数含まれている。とりわけ治水行政などのからみで、高木家文書とは密接な関係にあることから、所蔵者の日比達男氏より、名古屋大学に寄贈されたものである。

研究開発室では、さっそく概要調査を行うとともに、教育研究及び社会的な活用を願われて貴重な史料を寄贈された日比氏のご芳志に応えるべく、調査途上ではあるが、活用の土台を築く意味も込め、附属図書館と共催で、2006年秋季特別展「江戸時代の村と地域 - 美濃養老・日比家文書にみる暮らしと災害 -」（9/29～10/20）を開催した次第である。

実際の展示は、文書群の性格をもとに、当時の村と村人の動きを捉えることに主眼を置き、村の生活、村の運営、村と地域社会、街道と幻の運河計画、変わりゆく村、の5部構成で臨むことにした。

特に注目されるのは、幕末に彦根藩によって計画された、琵琶湖と伊勢湾を結ぶ運河計画の新史料であり、これまで未詳であった事業の実態解明が格段に進むことになった。また、1631年（寛永8）から1871年（明治4）までの年貢免定（納税通知書）が、ほぼ欠年なく残されており、地域環境史を探るうえで大変貴重な情報を得ることができた。

その分析の結果、沢田村は、背後にある養老断層谷からの土石流と、前を流れる暴れ川・牧田川の氾濫という狭み撃ちに遭い、頻りに年貢

の減免措置を受けながらも、幕末段階では7割を超える村人が飢人となるなど、大変厳しい環境下にあったことが明らかになった。その一方で、こうした環境と共存するため、土石流を発生させる谷の付け替え工事や、村人に崩壊地を貸与して治山対策を図る「兀留（はげどめ）証文」の工夫など、実にさまざまな減災措置がとられていたこともわかってきた。



写真1 (2006年秋季特別展・展示室)

展示室(写真1)には、こうした災害対応の史料のほか、沢田村が命運をかけた運河計画図や、2.5m四方もある水論裁許絵図など、江戸時代の村と村人が生き抜くため、どのような営みを続けてきたのかを物語る史料を掲げたが、その前で熱心にメモを取る来場者の姿が印象的であった。会期を通じて、学内外から多数の参観者を得ることができたことに対し、様々なご支援を賜った日比氏はじめ、関係各位にあらためて御礼申し上げたい。

なお、特別展開催にあわせて、附属図書館HPの電子コレクション「エココレクションデータベース」のうち、「木曾三川流域環境史」がリニューアルされ、衛星画像や旧版地図、古絵図、3次元CGなどを充実させた形で公開されている(<http://libst1.nul.nagoya-u.ac.jp/eco/index.html>)。今後さらに、日比家文書や流域の歴史情報資源を順次搭載し、コンテンツを拡充しつつ、GIS機能の高度化が図られる予定である。

3. 川普請絵図

2件目は、2006年9月、石川県在住の村野久彦氏から寄贈された江戸時代の大規模な川普請(河川工事)絵図である(写真2)。本図は、戦前、金沢で入手されたとのことで、全国的に注

目を集める附属図書館所蔵・高木家文書が結ぶ縁で、治水史研究の一助にと寄贈されたものである。



写真2 (川普請絵図、部分)

作者・作成年代とも未詳であるが、に十字という薩摩藩島津家のものに酷似した家紋が描かれていることなどからすると、木曾三川分流を企図した所謂「宝暦治水(1754~55年)」に取材した作品の可能性が考えられる。

現状は、縦43.5×横218.0cmに仕立てられているが、図の左右が欠落しているため、全体構成は不明である。ただし、普請内容については、土砂運搬の様子を描く程度で、普請そのものの紹介を意図したものではないとの印象をうける。とすれば、武士も含めた、多数の人員(図中の幟には、「・・・村」との記述もみえる)が動員され、炊き出しなどの費用支出があったことを強調するところに眼目があったものか。武士たちが刀を外し、それらが物干し状の梓木にまとめて置かれているような描写もあり、参加の様態を指示するものとして注目される。このあたりに、この作品の作成意図を解く鍵があるのかもしれない。

本図全体としては、人物の描かれ方など、相当の水準を示しているものと思われ、今後、美術史家などの協力を仰ぐとともに、関連資料を含めた調査を継続していく予定である。参考となる情報やご意見をお寄せいただければ幸いです。(中央図書館4階展示室における「2007冬展」で本図複製を公開中。)

4. 今後の課題

名古屋大学は、中期目標に「地域文化の振興」

をかかげ、中期計画には「地域自治体と連携した文化事業を充実する」ことを謳っており、それを具体化した年度計画（平成18年度）では、「地方自治体と連携した文化事業を充実する」として、「図書館は『木曾三川流域の歴史情報資源の活用』等の文化事業を更に継続して成果を公開する」ことを明記している。附属図書館及び同研究開発室は、こうした、本学の掲げる「地域文化の振興」の一翼を担うとともに、さらなる文化の継承・発展に寄与できるよう、地域社会と連携した、ねばり強い取り組みが求められている。

その際、先に触れたような寄贈史料については、大学に託された意味からも、公開にむけた整理・研究を重点的に行わねばならないが、その他の所蔵史料についても、さまざまな活用にむけた取り組みを、（拙速ではなく）段階的に進めていくことが重要な課題となる。

現在、附属図書館研究開発室では、上記プロジェクトとして、高木家文書及び東高木家文書など関連史料の調査を継続中であるが、さらに今年度からは、名古屋南部の新田開発や自然災

害などによる環境変遷、地域環境史に関わる岡田家文書（海東郡長須賀村＝現中川区富田町の庄屋文書、推定2万点以上）の整理にも着手している。

このほか、館蔵の尾張関係史料では、伊藤圭介文庫との関連が期待される野間家文書（尾張藩奥医師）をはじめ、浅野家文書（尾張藩士）、浅井家文書（春日井市）など、美濃関係では、長良川堤沿いの暮らしを伝える日置江村文書（岐阜市）ほか、杉山家文書（笠松町）、野口家文書（羽島市）、明楽寺文書（養老町）など、膨大な史料が整理を待っている。

さらに、神宮皇学館文庫や文庫外の史料も含め、適切な整理・研究を行い、新しい情報技術も加えながら発信することで、豊かな歴史情報資源として活用する道が拓けてくるだろう。課題山積であるが、引き続き、学内外のご支援、ご協力を切にお願いしたい。

（あきやま・まさのり 附属図書館研究開発室 助教授）

~~~~~

## 「館長と話そう！2006」を開催

昨年末の12月8日（金）15時から、中央図書館で第4回目の「館長と話そう！」が開催されました。今回の出席者は、文学研究科2名、法学研究科1名、生命農学研究科2名、国際開発研究科1名の計6名で、2時間にわたって図書館の資料、施設、利用などさまざまな面から、利用者の意見や要望が話し合われました。

中央図書館の各種サービス時間について、研究個室などの施設利用を平日17時以降の当日申込みによる利用を可能とする、土日祝日も利用可能とする、また時間外のAV資料の貸出しを可能とすることなどの多数の要望が出され、またOPACや電子的資料の使い方の講習会の充実について、部局図書室所蔵で研究室に貸出しされているものの利用の便の向上について、学術雑誌の講読タイトルの減少について、といった図書館利用者の日頃感じている問題点や要望が



挙げられました。さらに、中央図書館での雑談の多さや館内の飲食マナーが最近とくに低下しているなどの指摘もあり改善の提言もありました。また留学生からの問題提起では、利用案内の英語版等の整備、Webページの英語版の整備、学習用の洋書整備などの要望も出されました。

これらを受けて、附属図書館では、それぞれの意見や要望について実施可能なものかどうか検討し、改善を進めていくことにしています。



## 名古屋大学附属図書館・名古屋大学EU資料センター展示会・講演会を開催 「西洋の発見 - 幕末・維新期の遣外使節と留学生達 - 」

### 企画展ワーキング・グループ

中央図書館では、11月10日から24日（日曜日を除く）まで、法学研究科、経済学研究科との共催で名古屋大学附属図書館・名古屋大学EU資料センター展示会・講演会「西洋の発見」を開催しました。これは日本とヨーロッパ連合（European Union）との交流事業の一環として企画したものです。

本学では日本と西洋とが歴史的な出会いをした幕末から明治初頭にかけての日本の近代化をテーマにして、明治4年～6年の岩倉遣米欧使節団の記録『米欧回覧実記』等からオーストリア大使館が作成した25枚の大型パネルを借用して、その中から18枚と、本学が所蔵する幕末・明治初頭に欧米に渡航した使節団や多数の留学生が残した著作物を展示しました。



写真1 展示室風景

この中には、この種の記録として高く評価された、市川渡（文久元年遣欧使節団従者）の『尾蠅欧行漫録』（文久3序写本 岡谷文庫）や西周が訳述したフィセリングの講義『畢酒林氏萬國公法』（慶応4）などの貴重な文献が含まれています。

また、経済学図書室所蔵のEUを紹介する資料、EU Treaties（EU条約集）やOfficial Journal of the European Union（EUの官報）なども展示し、これらは実際に手にとって見ていただけるようにしました。さらに、11月からEU情報セ

ンターと名称変更したEU資料センターから、『マンガEUとユーロ』『EUを知るための12章』など6点の小冊子の配布があり、来場者に無料で差し上げることができました。

11月16日には、法学研究科の神保文夫教授による「幕末・明治の遣外使節と西欧近代法知識の移入」と題する講演会が開催されました。明治日本が西洋の法体系を取り入れる過程を中心に、関連の展示史料を紹介する内容で、学内外から110名の参加者がありました。この展示会・講演会は、学内の図書館職員によるワーキング・グループ（中井・伊藤・次良丸・豊岡・黒柳）で企画・準備したもので、その準備のために調査した参考文献や使節団参加者・留学生の著作等のリストを暫定版ですが、「西洋の発見」関係資料データベースとして、図書館ホームページから利用できるようにしました。

なお、この展示会は、パネルに代えて、1876-79年に翻訳されたベンサムの『民法論綱』『立法論綱』『刑法論綱』や箕作麟祥纂編輯『萬國新史』（1871～76）など10数点の文献を加えて、12月27日まで延長しました（但し、土・日・祝日は閉室）。

前半は短期間でしたが307名、後半は332名で合計639名の来場者がありました。

< 展示会ホームページ >



<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/event/tenji/2006seiyou/>



## 電子ブックが増えました。どうぞご利用ください。

図書館ホームページ > 電子ブック (<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/db/ebook/ebook.html>)

### Gale Virtual Reference Library

新たに15タイトルの専門事典が利用できます (合計26タイトル)。

これまでは東山キャンパス限定でしたが、2007年2月からは、鶴舞・大幸キャンパスでも利用可能です。

- ・ Acronyms, Initialisms, and Abbreviations Dictionary (頭字語・頭文字語・略語辞典)
- ・ Ancient Europe, 8000 B.C. to A.D. 1000 : An Encyclopedia of the Barbarian World (古代ヨーロッパ百科事典)
- ・ Encyclopedia of Buddhism (仏教百科事典)
- ・ Encyclopedia of Business and Finance (ビジネス・金融百科事典)
- ・ Encyclopedia of Islam and the Muslim World (イスラムとイスラム文化百科事典)
- ・ Encyclopaedia Judaica (ユダヤ百科事典)
- ・ Gale Encyclopedia of Alternative Medicine (代替医療百科事典)
- ・ Gale Encyclopedia of Cancer: A Guide to Cancer and Its Treatments (ガン百科事典)
- ・ Gale Encyclopedia of Medicine (医学百科事典)
- ・ Gale Encyclopedia of Nursing and Allied Health (看護学百科事典)
- ・ Macmillan Encyclopedia of Death and Dying (死百科事典)
- ・ New Catholic Encyclopedia (新カトリック百科事典)
- ・ Pollution A to Z (公害百科事典)
- ・ World Press Encyclopedia (世界報道百科事典)
- ・ Worldmark Encyclopedia of the Nations (国家百科事典)

### 理科年表プレミアム

『理科年表』の1925年(大正14)から最新版までを収録しています。

暦部・天文部・気象部・物理/化学部・地学部・生物部・環境部のジャンルごとに、約15,000項目の図表データにアクセスできます。

タイトルから探す「目次検索」や、50音順のキーワードから探す「索引検索」のほか、解説文などのテキストデータを全文検索することもできます。

検索した表データは、テキストデータ(CSV形式)でダウンロードすることも可能です。



化学書資料館

日本化学会の編集による『化学便覧』、『実験化学講座』、『標準化学用語辞典』を収録しています。図書にすれば、116冊分、約60,000ページに相当する情報が集められています。

目次や索引から見る方法のほか、キーワード検索や全文検索、化合物検索も可能です。

今のところ『実験化学講座』は第4版までの収録ですが、今後、第5版も収録される予定です。



EndNoteWeb (Web of Knowledge) が使えます！

文献管理・論文執筆支援ツールのEndNoteWebが利用できるようになりました。

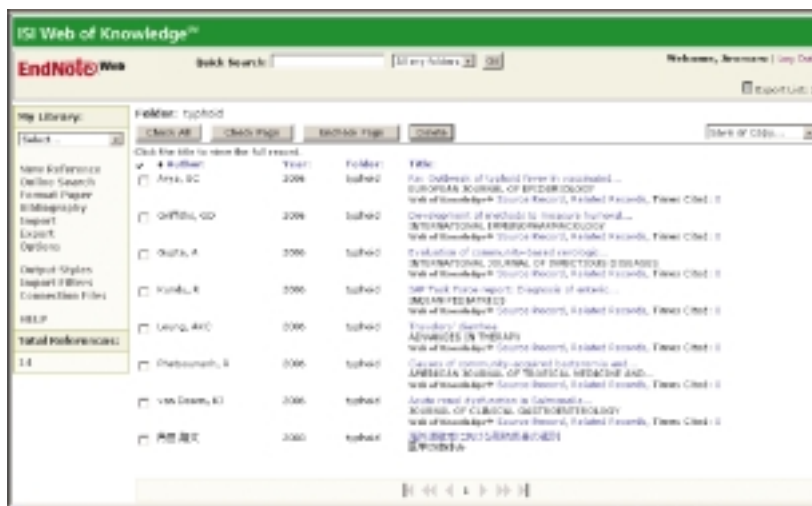
<主な機能>

データベース・電子ジャーナル等で収集した文献情報を整理する(＊)。

サーバ上に保存した文献情報に、外出先からアクセスする。Share Folders機能を使い、研究グループなどで文献情報を共有する。

学術雑誌(約2,300種類)の投稿規程にあわせた参考文献リストを生成させる。

Microsoft Wordと連動させて引用の記述を文書中に挿入する。



(＊) Web of Scienceからは、文献情報を直接エクスポートできます。その他のデータベースや電子ジャーナルからは、一旦パソコンにRIS形式等で保存のうえインポートしてください。

接続先：<http://www.myendnoteweb.com/>

アカウント： Web of Knowledgeのアカウントをお持ちの方はそのまま使えます。お持ちでない方は、学内LANにつながっているパソコンからEndNoteWebに接続して [Sign Up] するか、Web of Knowledgeのトップメニューで [register] して共通のアカウントを取得してください。一旦アカウントを取得すれば、そのアカウントで学外からも利用できます。

管理できる文献数： 10,000件まで

EndNote Webサポートページ：<http://www.thomsonscientific.jp/products/enw/support/>

(参考調査掛)

## 利用者から見た図書館

## パリの大学図書館を利用してみたい

小林 智

図書館という場所に行くと、書架のあいだを歩き回るうち、当初の目的を離れてついつい偶然目に留まった本を借りてしまいます。新着図書コーナーは要注意。そんな私ですが、この夏、パリの大学図書館のひとつ、キュジャス図書館\*を利用する機会がありました。

そこは、パンテオンを臨むところであって、過去の法律家の名を冠した、法学関連の所蔵においてフランスでも枢要な図書館とのこと。

それにしてはこじんまりした石造りの玄関をくぐり、エントランス・ホールで係のおじさんに利用カードを提示して階段を降りると、そこが閲覧室です。サンルーフから射し込む自然光が印象的で、ずらりと並んだ机には、これまたひしめくように学生さんたちが向かっています。ただし、晴れた日の昼下りはちょっと別。無人地帯が出現するのです。要するにサンルーフがあだとなるわけで、強い陽射しの下、机や椅子が熱を帯びるなか、目が眩んで文字が読めません。これはいただけませんでした。

本の利用についてですが、一部の基本書や判例集などを除いて、基本的には閉架式でした。館内のコンピューターから注文すると、同時に呼び出しの番号が自動的に割り振られます。カウンターの上に「免許センター」でお目にかかるような掲示板があって、そこに番号が点灯したら、本を受け取るのです。この方式、1回に

つき30分ほどかかります。本の内容が想像したのとは異なっていたり、そもそも注文したのとは別の本が誤って出てきたり、といったことがあり、その都度、余計に時間をとられてしまいました。

これと比べて、日頃お世話になっている中央図書館はどうかと考えると、採光性が良すぎて困ることはなかったように思います。逆に少々暗めの印象のところがあるかもしれません。それから、あらためて好ましく思われるのは、開架式であることです。待ち時間はかからないし、目当ての本を誤ることもない。内容もその場で確認できます。それに、行った先の書架を眺めれば、関連する分野の本が並んでいるわけです。

利用者が照会する場面で打てば響くような司書さんがいたりすれば別かもしれませんが、そうでなければ、利用者がわざわざ人を介さずに検索できて、書架に直接足を運べる利用方法のほうが合理的であるように感じた次第です。

\*パリ大学の3つの図書館のうちのひとつで、フランスの代表的な法律図書館の性格を持つ。蔵書数約100万冊。キュジャス(Cujas)は、16世紀の有名なローマ法学者。

(こばやし・さとる 法学研究科後期課程3年)

## ご存知ですか？

## 東海4県の公共図書館からの図書借用・文献複写サービスが利用できます

名古屋大学附属図書館は、東海4県(愛知・岐阜・三重・静岡)の58の公共図書館との間で相互利用協定を結び、2005年7月から相互の利用者へのサービスを行っています。学内の利用者は、中央図書館2階の相互利用カウンターで申し込みができます。利用できる図書館は、4県の各県立図書館の他にも、愛知県50館、三重県4館の市・町立図書館などです。図書所蔵検索は、各県の図書横断検索システムにより県内図書館の所蔵を一度で検索可能です。名大附属図書館ホームページの「OPAC」ページ左下の「他機関検索」から利用できます。

この相互利用協定に参加する公共図書館、利用条件などについては、以下のURLからご覧になれます。詳細は、中央図書館相互利用掛(内線3683)までお尋ねください。

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tokai/renkei/>





のメインテーマ(の一つ)でもあり、その意味で筆者の研究は王道を歩んでいると胸を張ることもできる。しかも、恋愛を結婚と結びつけて歴史的に考察するとなれば、後者は古くから社会制度の根幹をなすものであり、その背景の社会構造全体を視野に収めなければならなくなる。テキスト・図像ともに、一次資料を残した人々がほとんどすべて男性であるような時代を相手に、恋愛・結婚現象の一方の当事者である女性の実像に迫るのはなかなか厄介で、掴んだと思った途端に指の間からすり抜けてしまうようなことも幾度となく体験した。したがって、研究を厳しく苦しいものとする読者のために、本書には楽しさだけでなく、そのような悪戦苦闘の影も少しは射しているのではないかと期待している。

手っ取り早く言えば、恋愛結婚は、近世都市社会の経済的興隆と実質的日常を貴ぶ心性が産み出したもの、というのが本書の結論である。

この心性が、本来的に結婚とは相容れない恋愛を日常化し、その危険な情念を馴化し、堅固な社会制度と結びつける新しい結婚形式を成立させた。近世の市民たちは、結婚が安定した日常性の基盤となるために、その絆を結ぶ前提として愛情(相互的親和)が必要だと考えるようになった。この愛情がそのまま恋愛だとは言えないが、それは少なくとも宮廷風の恋愛作法を模倣することによって若い人々の心を捉え、市民権を獲得するに至った。

本書もまた多くの恋愛小説と同様に、恋愛が結婚に辿り着くまでに重心を置いている。現実の結婚生活で、かつて存在した恋愛がどのような変容を遂げるのか、本当の問題はそこからではないかと考える読者には、残念ながら本書は何も答えていない。

(所蔵：中央学 384.7/Ma ほか)

(まえの・みちこ 国際言語文化研究科教授)

~~~~~

第2回「国立大学附属図書館の課題に関する館長懇談会」を開催

平成19年1月5~6日に京都大学百周年時計台記念館国際交流ホールを会場にして第2回「国立大学附属図書館の課題に関する館長懇談会」が開催され、全国の国立大学から45名の館長が参加しました。法人化後3年近くを経て、大学図書館をめぐる情勢は厳しさを増すばかりですが、大学図書館の経営者としての自覚と見識と経営能力を高める場としてこの懇談会は2回目を迎えました。世話人は、大西京大館長、中村阪大館長と伊藤名大館長の3名でした。

1日目は、大西京大館長の挨拶のあと、伊藤名大館長により、昨年1月に名古屋大学で行われた第1回館長懇談会の報告がありました。今回の館長懇談会の進め方を議論してから、セッション1として「大学における図書館組織のあり方と地域貢献をテーマに、山口大館長から「情報関連組織の現状と地域連携への展望」、一

橋大館長から「人文社会科学系図書館と業務の専門性：一橋大学の場合」などの報告があり、討論が行われました。2日目は、セッション2「学術基盤整備のあり方」として、千葉大館長から「機関リポジトリ：見所・泣き所・堪え所・勘所・落とし所」、東京海洋大館長から「東京海洋大学学術機関リポジトリTUMSAT-OACIS：東京海洋大学の取り組み」と題する話



題提供があり、名大館長からも「日本における
学術機関リポジトリの展開」としてリポジトリ
運用に向けての経過説明と今後の展開のポイン
トについて提言があって、その後活発な意見交
換がありました。

さらに、セッション3「法人化後の図書館経
営」では、三重大館長から「三重大学附属図書

館国立大学法人化前・後・これから」と題して
報告があり、各大学で直面している問題点など
組織、財政、サービス、人事も含む多彩な話題
で、予定時間を超過する議論が展開されました。

なお、この館長懇談会は、参加者一同が意義
あるものと認め、来年度も開催することを確認
し、2日間の日程を終了しました。

中央図書館常設展示のご案内

**「2007冬展 (Jan.-Mar.) 普段は見ない大型本・稀覯本の世界」
& 所蔵資料紹介 (高木家文書・伊藤圭介文庫ほか、最近の受贈資料)**

ほぼ全面開架方式の中央図書館では、多くの本を利用者が直接書架で手にとって目にすることが
できますが、貴重書や準貴重書、和装本ほかの特殊形態資料、大型資料など、閉架書庫に納められてい
るものも多数あります。今回は、それらの中から卷子本や1枚物の資料などいくつかのジャンルの代
表的な資料を紹介しています。

また、研究開発室の常設展示として、高木家文書、伊藤圭介文庫の紹介展示と併せて、ここ1~2
年以内に附属図書館に寄贈された新蔵資料 (岐阜県養老町の旧沢田村日比家文書や「川普請絵図」など)
の紹介もしています。

その他、近年の附属図書館・附属図書館研究開発室が開催した特別展の展示図録なども改めて見て
いただけます。

中央図書館常設展示「2007冬展」

期間：2007年1月17日～3月31日 (予定)

平日 8:45～17:00 (土・日・祝日は閉室)

会場：中央図書館展示室 (4階)

【行事等】 <18.10.6 ~ 19.1.5 >

- ・名古屋大学附属図書館2006年秋季特別展講演会
「江戸時代の村と地域 - 美濃養老・日比家文書に
みる暮らしと災害 -」 (於：中央図書館) <10.9>
- ・NAGOYA Repositoryに関する報告会 (於：中央図
書館) <10.27>
- ・第2回東海地区CSI事業報告会 (於：情報連携基
盤センター) <11.8>
- ・名古屋大学附属図書館・名古屋大学EU資料センタ
ー展示会・講演会「西洋の発見 - 幕末・維新期の

- 遣外使節と留学生達 -」 (於：中央図書館) <11.10
~ 11.24, 延長11.29 ~ 12.27>
- ・「館長と話そう! 2006」図書館利用者との懇談会
(於：中央図書館) <12.8>

編集委員会

- 中井えり子 (委員長) 蒲生英博 (中) 藤田恵美 (中)
- 堀 茂 (中) 渡邊昌子 (法) 島山輝敏 (育) 山口典
子 (医) 山川幸恵 (農)